

中に女の声が聞こえて来ました。

「治郎助さん、さぞお困りでしょう。」

「あなたはどなた。」

「あら、お忘れになったの、それいつか一しよに酒を呑んだ女。思い出したでしょ。」

治郎助は思い出せなかったが、「ああわかった。わかった。よく助けてくれた。ありがとう。」

又のみにゆくよ。」

「ほんとね。では私についてらっしゃい。」

といって森を出ました。すると一軒の家がありました。火が赤々ともえていました。

疲れと安心で治郎助は眠ってしまいました。

あしたの朝、目をさましてみてもびっくりしました。家と思ったのは土手の中で、そこは焼場（火葬場）でした。焼けたワラ火が赤く輝いていました。